

第41回障害児・者作品写真展

福祉村

今年もイオン古淵店様のご協力のもと、8月2日から4日までの3日間開催いたしました。夏休み期間という事もあり多くの家族連れが見学に来られていました。市内の障がい系18団体が参加され会場は様々な作品で賑わい、相模福祉村からも多くの事業所が参加させていただき、会場の彩りを盛り上げました。障がいのある方々の魅力ある力作や、独特の観点の素晴らしい作品をこれからも皆さんに届けられるよう活動を推進していきたいと考えます。



縁JOY夏祭り!

縁JOY

8月5日(土)縁JOYで第10回夏祭りを開催致しました。数日前よりやぐらを組み、テントを張り…徐々に夏祭りモードになっていく縁JOYを見て「楽しみにしています」「遊びに行きますね」等の声を掛けて頂きました。天気予報では、雨が予報され心配されていましたが当日は見事に快晴。今年も光明学園相模原高等学校和太鼓部の素晴らしい演舞で夏祭りが始まり、お祭り日和の中地域の方々やご家族様、ご利用者と一緒に楽しい1日を過ごすことが出来ました。今年は模擬店に新しく縁JOYパフェやジョイプリ(パスタを油で揚げたもの)を加え、ゲームコーナーをより充実させることで小学生の来客も多く子どもからお年寄りまで幅広い年代の方々に楽しんで頂くことができました。例年多くのボランティアさんにご協力を頂いておりますが、今年は中学生や高校生等を含め100名を超える方々にご協力を頂き、無事に夏祭りを開催することができましたことを感謝致します。紙面上からではあります、厚く御礼申し上げます。



介護相談員の受け入れ

柴胡苑

相模原市の派遣事業として介護相談員が1ヵ月に1回来苑しています。この事業は一定の研修を受けた方が申し出を受けた施設に派遣されます。介護サービスの質的向上図り、苦情に至る事態を未然に防ぐとともに利用者・施設の双方の立場に立ち、話を聴き、両者の橋渡しを行うことでサービスの向上を図るものです。実際の声として日頃から訪問して頂いている田口相談員より「利用される方の個性や特性を活かした生活が送れていると感じています。また状態が低下された方が翌月に訪問すると回復されている姿を見ると介護者の日々の取り組みの成果と嬉しく思います。これからも利用される代弁者として施設の方へ気付いたことを伝えていきたいです」とお話を頂きました。2時間ほど滞在され施設としても毎回、状況を確認し必要に応じて対策を講じています。これからも様々な第三者の意見をいただきつつ安心・安全・信頼のある施設づくりを続けていきたいと思ひます。



寄付・寄贈(敬称略・順不同)

【寄付】 野田 義男 【寄贈】 金銅 幸俊

紙面上からではございますが厚く御礼申し上げます。

▼第393号の全ての文責等は、『福祉村だより』編集委員に属します。

福祉村だより

題字 相模福祉村代表: 赤間 一之



9月号No. 393

2017年9月1日発行



“Sさん”の成長が私たちの夢 前編

発行人

相模福祉村理事長 赤間 源太郎

住所 相模原市中央区田名6769

E-mailアドレス sagamifukusimura@tanpoconoie.or.jp

ホームページアドレス http://www.fukusimura.or.jp

発行所 相模福祉村たんぽぽの家

電話 042-761-7788 FAX 042-763-3318



ホームページQRコード

“Sさん”の成長が私たちの夢 前編

たんぼぼの家

昭和58年開所以来、たんぼぼの家では障がいのある方のご家族や行政機関より様々な相談を受けています。それぞれの相談について「何が原因で困っているのか、今後はどのような生活が望まれるのか」などを関係機関と共に協議し支援してきました。支援課職員もご利用者やご家族にとってより豊かな生活とは何か、その為にはどのような支援が必要かなどを日々考え支援しています。障がいがあるが故に時間を要する事もありますが、支援にあたる職員は寄り添いながら地道な努力を重ねています。これから紹介するSさんはひきこもりから不登校でありましたが、たんぼぼの家を利用した事をきっかけに通えていなかった中学校を卒業し、今では社会人として一般就労に向かって頑張っている事例です。今月9月号と来月10月号の2回にわたって紹介いたします。

たんぼぼの家から将来の一般就労にむけて、一人の若者が法人内高齢者施設・柴胡苑の厨房実習として働き始めています。

さいこえん

今年、二十歳になる“Sさん”です。5年前にたんぼぼの家に家庭の事情で兄弟5人と共に短期入所として利用されました。当時は中学3年生でした。兄弟4人はたんぼぼの家より小・中学校へ通学しましたが、“Sさん”は中学校1年から不登校になり、引きこもりだったためにたんぼぼの家でも部屋に引きこもっていました。当初、たんぼぼの家でも食事や入浴の時間を皆さんとはずらしたり、日々の作業も別室で個別で対応を行っていました。特に人との関わりやコミュニケーションを苦手にされ、他者とは話をする事はもちろん目を合わすこともなく生活をされていました。しかし、前途ある若者の長い人生を考えていくとこのままではいけないと思い、まずは『部屋から出る』ことを目標に職員二名と“Sさん”だけのサッカーや野球などの軽運動を行い、少しずつ関わりを持つようにアプローチしていきました。



陶芸作業では体験学習の生徒さんに教える場面も見られました

やはり最初は部屋から出ることに躊躇したり、周囲の目を気にしたり、部屋から出て移動する時も壁側を向いて移動していました。我々職員は『焦らず、急がず、本人にとって負担にならないように』と心がけ、人目につかないように時には職員が壁となって移動したり、職員が先にフロアに人がいないことを確認して誘導するなど、様々なアプローチや支援をしていきました。すると徐々に“Sさん”に変化が見え始めてきました。少しずつ目を合わせてくれたり、こちらを向いて話をしてくれるようになってきました。



他ご利用者と共に外出できるようになり田名高校の野球部応援に行きました

およそ一か月が経過し短期入所利用の終了する日を迎えました。この一か月の様子を振り返り、家族や児童相談所の職員に報告すると共に今後についても話し合いを行いました。施設側からSさんに「学校に行かないんだったら、たんぼぼの家に来たら？」と伝えたところ、本人から「たんぼぼの家なら、行ってもいい。」との言葉が聞かれ、児童相談所の職員に確認のもと、たんぼぼの家に通う事になりました。

自宅からたんぼぼの家に通う生活が始まり、最初はやはり数人と一緒に乗車する送迎車には乗ることが出来ず、単独での送迎を利用されたたんぼぼの家に登園するようになりました。最初のころの送迎は本人の慣れている職員が行いました。たんぼぼの家に到着し、職員が短期入所利用時と同じく周囲の確認や誘導をしました。誘導途中に職員が集まって打ち合わせをしているところを通る際には顔を伏せて無言で隠れるように通り抜けていました。その時に職員側から「おはよう！」とあいさつをしても最初は反応もないことが続いていました。しかしあいさつを続けていたところ、小さな声で「おはようございます。」と返してくれるようになってきました。

職員とは挨拶はできるようになったものの、ご利用者の方には視線を向けることもなく、まだ打ち解けるまでには至りませんでした。それでも毎日、二～三人のご利用者と一緒に部屋で作業を行い、食事においてはSさんの座る場所を決め、周囲が気にならないように配慮したり、職員とだけ行っていた軽運動を年齢の近いご利用者の方を交えて一緒に行っていたり、他者との関わりを少しずつ増やしていくことで変化が見えてきました。徐々にたんぼぼの家に通う事に安心されたのか、引きこもって不登校だったのがウソかのように、通院や医療相談以外ではたんぼぼの家に休まずに登園されるようになりました。その休まずに登園する様子や姿を中学校の先生、児童相談所のケースワーカーに報告すると『たんぼぼの家に登園して作業や日課を行っていることを学校に登校していることや授業に出席していることとみなし、卒業を認定しましょう。』と特例の処置をしていただきました。

しかし、そこで新たな問題が出てきました。『“Sさん”が卒業式に出れるのだろうか？』、『知らない人が多くいて、少ないけども集団の中に入り卒業証書を受け取れるのだろうか』ということでした。そこで本人の気持ちを確認するために「たんぼぼの家に頑張って登園したり、作業を頑張っていることが認められて卒業できることになったよ。卒業式は出れますか？」と聞いてみました。“Sさん”は「う～ん…」と悩み始め、「出ないといけないのかな？」との返事でした。理由を聞くと、やはり我々が考えていたように「同世代の人の視線に対する恐怖心」が強いものでした。しかし『これは彼にとったら、もしかすると成長や変わるチャンスではないか…？』と考え、本人と話し合いをしました。「“Sさん”の頑張りをみんなが認めてくれたよ。卒業を認定してくれてるよ。これは家族に自分の成長、変わった姿を見せてちょっとでも恩返ししなくちゃいけないんだよ。もし、まだ周りが気になるんだったら職員もお願いして卒業式と一緒に出させてもらおうから、絶対に出ようよ！！」と伝えると、「…うん、分かった。一緒に出られるなら出してみようかな。」と前向きな返事をくれました。



クリスマス会では舞台にあがり人前で歌も唄う事が出来ました

卒業式当日は同級生と一緒に卒業式とまではいきませんが、数名で行われる二部の卒業式に職員も同席させてもらい、保護者をはじめ関係者が見守るなか無事に卒業証書を受け取りました。

これまでの不登校の経緯やたんぼぼの家を短期入所利用された当初の引きこもったり、人がどんなに少なくても集団の中に行くことが出来なかった“Sさん”。その“Sさん”が部屋から出られるようになり少ない集団ですが輪の中に入り、卒業を認定してもらって卒業証書ももらい無事に中学校を卒業できたことは、初めて“Sさん”と会った時からとても想像ができず、たんぼぼの家の職員一同、感激したのを覚えています。“Sさん”が初めてたんぼぼの家に利用されてから半年後の出来事でした。
(報告者 支援課 主任 高土 智則)

次号では卒業後たんぼぼの家を利用し、就労に向けた実習に結びつくまでをお伝えします。